



時代の肖像



デントンを支えた
「天使が翼をたたむ」女性

星名(末光)ヒサ(久)

一八七四〜一九五四
一八九八年同志社女学校普通科卒
一八九九年同志社女学校専門科文学科中退



晩年の星名ヒサ

星名ヒサは
明治七年六月
二十一日、愛媛
県宇和郡卯之
町に末光三郎・
ちか夫妻の第

四子(三男五女の三女)として生まれた。実家の末光家は古くからの地主であり、酒、醤油の醸造なども営む素封家であった。兄や妹の影響もあり、同志社での勉学を切望した彼女は、適齢期を理由に反対する父を説得し、「駕籠でひっそり家を出て」「同志社時報」八五号)、満二十一歳で同志社女学校への入学を果たす。

翌年に受洗したヒサは、普通科卒業後に専門科へと進むが、一年後に故郷に呼び戻された。その後星名謙一郎との結婚のためにハワイに渡り、さらにテキサスに移住する。夫・謙一郎は東京英和学校(現・青山学院大学)第一期卒業生で、開拓事業のかたわら伝道にとりくみ、移民社会に貢献した人物である。しかし彼がブラジルへの移住を決断したとき、ヒサは子供たちを日本で教育する(注一)という信念を貫き、「婚家や実家に一切頼らず生きる覚悟があるなら」「(江上幸子『無心のときを求めて』)という夫の言葉を受けて、自活の道を選ぶ。アメリカで修得した洋裁と刺繍の知識に加えて、英語力も評価され、彼女は松山女学校(現・松山東雲学園)で

教鞭をとることになり、一九二二年には恩師デントン(注二)に強く請われて、同志社女学校に着任した(一九三〇年からは女専教授)。

以来彼女は「同志社女子部の母」デントンの最大の理解者・無私の



星名久「洋裁と修飾」(開隆堂書店、1936年)

協力者となり、第二次世界大戦中も含めて、三十七年の長きにわたって、デントンを世話し、支え、守り続けたのである。デントンに対するヒサの献身ぶりは、多くのエピソードによって語り継がれているが、特筆すべきは、彼女の素晴らしい行動力―普段は謙虚で控えめでありながら、必要な場合には毅然と行動でき、まさに新島が理想とした「良心を手腕に運用」できる資質―であろう。デントンは戦争中、日本滞在を特例で認められたものの、特高の監視下での軟禁状態を余儀なくされた。牧野虎次総長や、高等女学部教頭の末光信三(ヒサの末弟)を始め、同志社の関係者が気づかない、支えてはいたものの、昼夜を問わず傍でデントンを守り続けたのはヒサである。大きな地震があったときにヒサがデントンに覆いかぶさり、小柄な身を挺して守ったという感動的なエピソードがある。また、デントンは知る由もないが、ヒサが町内の防空訓練で「鬼畜米英」と叫びつつ、英米国旗を踏みつけるよう指示されたとき、「私にはそれは出来ません」と応じ(江上幸子「デントン先生―生涯を私たちに捧げてくださった」)、静かな勇気を示したことにも記憶に留めたい。

晩年のデントンがヒサに寄せた全幅の信頼は察して余りある。彼女が折々にヒサを評して語った言葉―「ミセス星名が天国に着いたら(…)他の天使はみな、ただ翼をたたむでしょう」(クラブ「ミス・デントン」)―には、この傑出した女性への、デントンの心からの感謝と敬意が溢れている。

(注一) テキサス生まれの長男・秦(工学博士)は後に同志社大学学長となり、娘の幸子(同志社女専卒業後、英国に留学)は江上波夫(文学博士。一九九一年には文化勲章受章)との結婚後、同志社女子中高の教諭を務め、晩年までYWCAのさまざまな委員を歴任するなど、国内外で活躍した。

(注二) 一八五七〜一九四七。宣教師として来日し、ほぼ六十年の歳月を同志社女子部のために捧げ、甚大な貢献をした。

小山薫(表象文化学部 英語英文学教科教授)



忙しい日常にあって、ヒサは夫・謙一郎に宛てて、毎週日本の新聞を送り、折々に子供たちとの写真を郵送したという。